

翻訳文学目録』によると、明治四十四年（一九一一年）九月発行「帝国文学」十九卷第九に掲載された藤波水處訳「マテオ・ファルコーム」であるから、鷗外がメリメに接したのは独訳に拠つてであろう。トラアールとジョスラン編著の『メリメ著作書誌』に拠れば、メリメの作品はほとんどが独訳されていて、例えば『シャルル九世治世年代記』は仏において刊行された一八二九年にすでに独訳があり、『ドン・ペドロ一世伝』にしても一八五二年にライプツィヒで刊行されているのである。鷗外がこれらの歴史小説や史伝まで読んでいたかどうかは確証がないが、仮に読んでいたにしても、おそらく彼のことから敢えて公言しないだろうと推量するのは、筆者の勘繰りと言うべきか。周知の如くメリメは『クララ・ガスルの戯曲集』をスペインの女優クララ・ガスルの作の翻訳と称して刊行し、さらに叙事詩集『グズラ』もまた「ダルマティア、ボスニア、クロアティア、ヘルツェゴヴィナで集めたイリリア語の詞華集」の翻訳として刊行し、前者は直ちに見破られたが、後者は多くの人を欺いて、プーシキンの如きはわざわざロシア語に翻訳などして、その迂闊さをメリメから揶揄されている。鷗外がメリメと等しく、韜晦趣味と同時に、他人に内心を見透かされまいとしてポーズを取りつづけていただけに、それだけに一層そのような憶測も許されるのではなからうか？ だが、もちろん許されるからといって、そこに影響関係ありと即断するものでないことは改めて申すまでもない。ただそのような仮説も許されるということと言いたかっただけである。本稿は両者の影響関係を述べるのが本意でなく、ただ二人のもつ類似性をあげつらつたに過ぎないのであって、これによって二人の文人の在り方、およびそれぞれの文学の究明に些かなりとも資するところがあれば、筆者としては望外の仕合わせだと信ずるしだいである。

事実を追求してゆく考証癖、作中人物の個性を際立たせ強く読者に印象づけるといった伝記作者としての素質は、二人ともに恵まれていた。ただメリメには鷗外の史伝に見るような「わずかな材料をもとにして、それからそれへと蔓をたどって、ある肖像画を完成する過程にあるおもしろさ」（戸板康二氏）はないが、本筋を離れた挿話のおもしろさ、およびその使用頻度においてはメリメのほうが勝っていると思われる。

ところでメリメをわが国に始めて紹介したのは、ほかならぬ鷗外なのである。明治二十二年（一八八九年）十一月発行の「柵草紙」二号掲載の「今の諸家の小説論を読みて」において彼は、ヘスケッチとヘノエルとを定形を成すか如何によって両者を区別し、後者を英語の意義において小説なりと観じた後、さらに小説の叙法を二つに分け、「一人若くは数人の事を叙して、これと俱に当時の国運世態に及ぶのを（そくは復稗）、独逸諸家の所謂ヘロマアン」となし、或は一人若くは数人の事を叙して、当時の国運世態の如きは多くこれを省略し、縦令之を言うも僅に其依稀たる影象を見はすに過ぎざるもの……之を単稗ヘノエルと是なり」として、その単稗の例として「仏にはメリメエの小著の如きものあり」と断じている。ここで単稗は短篇と解していいので、メリメを短篇作家と見た鷗外の評は当を得ていると言えよう。

さらに明治三十一年五月発行の「めざまし草」巻二十八においては「審美新説」と題して芸術教化の可否を論じ、「詩には別に善を以て根調となさざるものなり、是れ観善懲惡の効をなす限にあらず。』述の外、Balzac, Turgen-jeff, の諸作、Prosper Mérimée の作 Carmen, Thackeray の作 Vanity Fair の類も亦始より善を以て根調となさざるものなり」と言っている。メリメの作品が始めて本邦初訳されたのは、国立国会図書館編『明治・大正・昭和

闘い抜いたその人となりには惹かれ、その生涯を描いたのである。但しこれらはコストマローフ氏の原書を読んで僅かに一年にして書かれたものであり、言わば翻案に近いとも言えるであろう。これは鷗外が蘭軒を伝するにあたり、「筆を行る間に料らずも北条霞亭に逢着」した結果、二百余通の矢書牘があつて、それに拠つて史伝『北条霞亭』を執筆するに至つた経緯とは、多少の違いがあろうとも、共に安易な手段によつたことは覆うべくもないであろう。

鷗外の処女作とも言うべき「舞姫」の冒頭にある「……こたびは途に上りしとき、日記ものせむとして買ひし冊子もまだ白紙のまゝなるは、独逸にて物学びせし間に、一種のヘニル、アドミライの氣象をや養い得たりむ」と述懐しているが、メリメもこのような何物にも心動かすことなく、心を外にあらわさないの氣象を自伝的要素のつよい「エトルリアの壺」の冒頭で描いている。「世評を氣にして彼は……恥さらしなことや自分の弱点を、いっさい外に見せないように心がけた。だが優しすぎる心の感動を他人にかくすことはできたが、このようにして感動を心の中に閉じこめることによつて……彼は社交界から冷酷無情というありがたくない評判を受けたのである。」

メリメが冷酷無情な持ち主であるとは思わぬが、前述したように彼が非情なまでの残酷な情景を描いていることは彼の全作品を通じて見られることであつて、思うにペシリストであるメリメは人間のもつ嗜虐性を疑わなかつたに違ひなく、人間には本能的に残酷さを好む傾向があり、それが偽善の仮面の下に隠されていると信じたからであろう。だから題材にしても王位篡奪とか僭称者とか復讐といったものが多く、この題材の選択や嗜虐性の傾向は鷗外にも共通する点が少ないからず、例示すれば切りがないが、『阿部一族』『堺事件』『山椒大夫』などの歴史ものによく現われていると思う。なんといつても両者に共通する点は資料を漁つて、その真偽を比べ合わせながら飽くまでも客観的に

『メリメ』の中で、次のように述べている。

「わたしはこの小説は、極端な善悪の両面を持っているように思われる。概観してあらゆる成果を挙げると同時に、あらゆる貧困さ、あらゆる弱点を暴露している。彼はどの作でもこれほどアカデミズムに対して盲目的な信奉を見せではないし、よく書くという歎かわしい配慮を見せてはいない。この史伝において彼は、いままでにないほど忠実に先人の間違った遣り方を踏襲している。ナバレッタの戦闘は、鮮明で活気のあるテトス・リヴィウスの描くドラマティックな戦場なのである。メリメは中世の戦術なり兵器なりを読者に知らせようとするときは、ローマ人の戦術や兵器をそれらに対照させて説明しているし、カステイーリャのごく珍しい特異な教育機関を見せるときには、同時代の英仏のそれとの対比なり類似なりを際立たせることによってはっきりさせている」のである。

だがメリメは、この史伝を書くまでに長い歳月をかけて資料を採集し、大いに気負って書いたればこそ、それだけに余分のものを捨て去る決断を欠き、その結果くどいと感じられる叙景や冗長と思われる比喩が見受けられるのであろうか。その点一八六五年に『昔のコサック』と題して刊行されるに至った「ステンカ・ラージン」にしても「ボグダン・フメリニーツキー」にしても、いずれもニコライ・イヴァノヴィッチ・コストマーロフの記録を基にして書いているだけあって無駄な記述がなく、結構たのしく読める。両者ともにメリメが関心を抱いた人物で、前者では時の社会組織に対して闘いを挑んだラージンの精神力の強靱きょうじんさと、その組織力とを称揚しており、後者においては、このザポロージェ軍団の首領が、たんに勇猛果敢な知謀に長けた軍師であつたばかりでなく、戦い利あらず破るるとも屈しない堅忍不拔の精神の持ち主であつて、強大な隣国に囲まれた小国の指導者としてその生涯を自国の独立のために

のある抽齋が全然無名の存在であることに對する忿懣と同情とがあり、未知のものを発掘する情熱があった」からで、従来の一応は「歴史そのままの」歴史小説の主人公とは違つて、鷗外は抽齋のなかに自己の理想像をみいだそうと念じたのである。

メリメの『贗のドミートリー』がやはりそうで、なるほど彼は最初の贗のドミートリーに自己の理想像こそ求めはしなかつたが、この僭称者に惚れこんで書いているのであつて、この点一脈通じるものがあり、両者に共通するものはそれぞれの作中の主人公に対する打ち込み方であり、生気に溢れているその叙法である。大方の読者が鷗外の史伝中では『抽齋』を推すのも首肯されるわけで、またメリメの史伝にあつては『贗のドミートリー』こそ、読みだしたら巻を措くあたわざる所似があるわけであろう。

『伊沢蘭軒』は周知のとおり『抽齋』よりははるかに大部の史伝ではあるが、蘭軒は鷗外が『抽齋』執筆中にたまに出会つた抽齋の師であり、それより芋蔓式にその子榛軒、柏軒におよび、さらにその親戚や周辺にいる人びとに言及するのであつて、『抽齋』にあつてはその人中心に記述されているのに反して、『蘭軒』では次々と派生して来る諸人物がかなり大きな比重を占めていて、だからこそ一層の興味をそそられるという見方もあるかも知れないが、やはり煩瑣で冗長に感じられるというのが、大方の一般的な見解であろう。

『ドン・ペドロ一世伝』がやはりそうであつて、メリメは残虐王とみなされているドン・ペドロの性格を王の生きた十四世紀という世代に帰せしめんがために、その時代の風俗習慣を描いたわけだが、その叙述がくどすぎて、ときには冗長に感じられることが無くもないのである。メリメの良き理解者であるオーギュスタン・フィロンは、その著

られて、此^{くわだて}企を抛棄してしまった」のである。

この小品がもつと大作になって欲しいとはだれしも思うに違ひなく、鷗外がこのテーマで力作を書かなかつたのは、返すがえすも残念である。彼は最初の長篇「青年」で、あまりに自己の再現を期したがゆえに失敗し、恋愛はついに描き得ず、「雁」では一応成功したものの、主人公の岡田は洋行してしまい、ひたすら勉学にいそしむ岡田はついにヒロインのお玉と恋を語らうことなくして終わる。この「雁」につづいて書かれた「灰燼」の節蔵は、「青年」の純一や岡田のように調和のとれた人間でなく強烈な個性の持ち主であり、それゆえに節度を主んずる鷗外はもて扱って、ついに中断せざるを得なくなったのであろう。「雁」は完成したが、それには二年の中絶期間があり、そのあいだに彼は最初の歴史小説「興津弥五右衛門」にたどり着き、ここに己れの光明を見いだすのである。そして武鑑を調べているうちに抽齋に会うのである。その大正四年十月には澀江抽齋の遺族ともめぐり会い、翌年一月からその史伝を「東京日日新聞」に連載したのであって、その間に発表された「梶原品」が不燃焼の単なる随筆体の小伝として終わったのも止むを得ぬかもしれない。だがこの作中の〈品〉は、抽齋の妻〈五百〉となって再現するのである。この品や五百といった男まさりの気丈な女丈夫の存在は、メリメのカルメンやコロンバと一脈通じるものがあり、両者の女性観に共通点が見出されておもしろい。抽齋に対して鷗外は、『伊沢蘭軒』の「三百六十九」で次のように述懐している。

「抽齋はわたくしの偶^{たま}邂逅した人物である。此人物は学界の等閑視する所でありながら、わたくしに感動を与ふことが頗^{すこぶ}大であった」。つまり荷風の「隠居のこごと」にもあるように「自己と職業、経歴、趣味などに近いもの

えて事実を曲げたりすることはその本分にもとると固く信じていたので、文字どおり客観的に、感動も憐愍も、悲しみも喜びもなしに事実を描いているのである。

この点鷗外も同様であって、「わたくしは又現在の人が自家の生活をありの儘に書くのを見て、現在がありがちな儘に書いて好いなら、過去を書いても良い筈だと思った」とあるとおり、達観して歴史小説に転向したのだった。じじつ、諸記録を分類したり比較したり、また判断を下す批評精神に富み、過去の人物の思念だとか彼らの品行だとか意欲などを明察する直観力は、両者ともに恵まれていた。メリメにしても鷗外にしても研究心が旺盛で穿鑿好きであり、また大なり小なり作中人物に自己の理想像を見いだそうとしている点で共通したものがあり、その要望の強い作品ほど勝れている。「わたくしの抽齋を知ったのは奇縁である」と鷗外は述べているが、抽齋は蘭軒や霞亭以上に鷗外によって敬慕され、親愛感を抱かれていた。加うるに同じく作中人物の抽齋の妻五百のなかに、鷗外は理想の女性を見いだしているのである。前述した「歴史其儘と歴史離れ」中の有言な言葉「……現在がありがちな儘に書いて好いなら、過去も書いてよい筈だと思った」は、自己の創造力の不足を痛感したときの鷗外が、過去の史実に仮托して自己を語ろうとする、つまりは弱気のとときの彼の率直な告白でしかなく、例えば「すぎのほらしな相原品」執筆後にあつて鷗外は、このような随筆ふうの小文で、「伊達騒動を傍観してゐる綱宗を書こうと思つて」果さなかつた自分をかこっているのである。「外に向つて発動する力を全く絶たれて、純客観的に傍観しなくてはならなかつた綱宗の心理状態が、私の興味を誘つたのである。私は其の周囲にみやびやかにおとなしい初子と、伶俐で気骨のあるらしい品とをあらせて、此三角関係の間に静中の動を成り立たせようと思つた。しかし私は創造力の不足と平生の歴史を尊重する習慣とに妨げ

だがメリメがこの史伝を書くに至ったのは、じつは彼が最初の賈のドミートリーその人の性格に惹かれたからなのである。じじつ彼は、最初の賈のドミートリーに惚れこみ、この僭称者の智勇兼備を説き、その心の寛大さを機会あるごとに指摘し、それと対照的に二番目の賈のドミートリーのだらしなさを描いている。彼は最初の僭称者をピョートル大帝の先駆者であるとなし、もう少し慎重さがあって優しさが無かったならば、大業を成就して連綿たる帝室の始祖にもなれたような気がするとまで極言しているのである。なるほどこの史伝の題材はいかにもメリメ好みであり、彼はこの血なまぐさい陰謀の連続、その残酷さ、その神秘性、その原始的な習俗の絵巻物に対して魅せられたのであって、またこのような嗜虐性への傾向や、非情なまでの、ぎりぎりの気持を捉えて浮き彫りする手法は、彼の初期の作品『グズラ』、『シャルル九世治世年代記』から『昔のコサックたち』に至るまで、彼の作品中に随所に見受けられるものなのである。なおこのような嗜虐性への傾向や非情性の在り方は鷗外の作品中にも見られるところであって、「舞姫」に始まって、彼の封建制度の武士道の顕現を取材した歴史小説のなかに屢々見られることを指摘しておく。

メリメの言う「歴史のなかでは逸話しか好まず……アスパシアのまぎれもない回想録や、またはペリクレスの一奴隷の偽らざる記録を手に入れるためなら、よろこんでトゥキュディデスを与えるであろう」と言っている彼のことから、一国の帝位を国民全体を欺いて、一人ならず二人三人までが帝位を僭称しようとした偉大なる喜劇、そのあいだに伝説や魔術、妖術などが織り込まれ、絶えず掠奪だとか虐殺だとか串刺し刑だとか、そういった原始的な詩情に満ちているこのロシア歴史の挿話は、それだけでも充分に彼を惹きつけたにちがいない。しかも彼は、歴史家というものは、小説家によくありがちな幻想に耽ったり、想像力に頼って史実を補足したり、また自己の同情心や良心に訴

島に絶対君主国家が確立されるに至るのである。

メリメは本書において「歴史というものは、物語を政治上の事件のみに限定すべきではない。歴史はなお昔のひとの風習なり性格なりを知らしめる事実をも記録しなければならない」と言っているが、彼が一君公の性格を描くことによって十四世紀のスペインを示そうとした点では、彼は歴史家というよりも年代記作者に近い。彼がわれわれの眼前に繰りひろげる十四世紀スペインの残酷さと宿命観、伝説と迷信、血と拷問に対する嗜好、こうした野蛮な嗜虐的な仮面の下にメリメは、騎士道的な名誉や英雄的な行為、正義に対する努力や献身、苦痛や死に対する蔑視感といったものが隠されていることを示したのである。

メリメは一八五二年末に、彼の史伝を代表するもう一つの長篇『ロシア歴史の挿話——賈のドミートリーたち』を翌年刊として刊行している。これは同じ題材を扱った戯曲「賈のドミートリー」（五三年にミシエル・レヴィイから他二篇と共に刊行されたときは「山師登場」と改題）が、同年十二月十五日の「両世界評論」誌に掲載されたからである。メリメはプーシキンがその史劇『ボリス・ゴドゥノフ』の中で、賈のドミートリーと還俗僧グリゴリー・オトレピエフとを同一人物として扱っていることに疑念を抱き、それに反駁したいために本書を書いたのである。彼はこの小説の中で、僭称者と還俗僧とはけっして同一人物ではないと、確信をもって大いに自説を主張している。彼はまた人物評論「アレクサンドル・プーシキン」の中でも、また戯曲「賈のドミートリー」の序文でも、オトレピエフと賈のドミートリーとは同一人ではなく、それはボリスの作り話だと強調しているところを見ると、よほどこのことが気にかかっていたとみえる。

相反する呼称に就いて、前者を十四世紀という時代性に帰せしめ、後者に触れてペドロ王の人間性を止揚しているのである。この君主の性格は彼が蒙った不幸の数々や王の生きた時代に拠るのであって、身内の者に裏切られたので猜疑心が募り報復を試みるようになったのであり、そのために行なう自己の感情を偽わる狡猾さや残忍さは、この時代特有の風習といってもよく、いわば一種の保身術であって、これは何もドン・ペドロ王に限らないと説くのである。

メリメがこの相反する呼称をもつ専制君主に惹かれたのは、彼の作家としての趣味なり気質に拠るのだった。カルメンのドラマティックな在り方もドン・ペドロの悲劇性も彼にとっては同じもので、どちらも情熱によって支配され、神秘的な運命によって事件の推移が導かれている。メリメはこの不運な王について、彼が一世紀遅れて生れなかったのは間違いであったと指摘し、こう述べている。

「ドン・ペドロは貴族の権力の廃墟の上に国王の専制国家の創設するのが狙いであったのであり、かなり以前から彼はこの考えしか持っていなかった……そして彼の厳しさは大家臣にしか及ばなかったものであって、もつとはっきり言えば、それは彼らの国や主君を裏切った者どもの上に最もしばしば加えられたのである。王は徒党を組んだ貴族らによって惹き起される反乱に対しては厳罰をもって臨み無慈悲に罰したが、人民たちは、大家臣に対しても卑しい身分の者に対すると等しい服従を要求する主君の公平さを称賛していた。十四世紀においては、公平な専制主義は人民たちにとって一つの善行だったのである」。

じじつ彼の歿後一世紀を経た一四七五年にアラゴン王フェルナンド二世が即位したが、そのときは王は十年前にすでにカステイリヤ女王イサベル一世と結婚していたのでスペイン王国は統一されたわけであり、これより徐々に半

セは身上話を一度中断して聞き手に話しかけるのみであり、最寄の屯営所に自首した後、ミサをあげてもらってから「考えてみれば、かわいそうな女だ！ あんなふうに育てられたのも、みんなカレたちがわるいのです」と詠嘆して終ってしまい、物語を聞いているはずの考古学者との関係は断絶したままなのである。それゆえ二年後にメリメは甚だ銜学的な第四章を加えて首尾を整えたわけだが、その内容たるやあまりに専門的なきらいがあり、第三章から読み進んでいくと第四章だけが孤立してしまつて、メリメの意図とは裏腹に、話者と第一章の考古学者とは結びつかず唐突な感がして、返って逆効果になつてしまつた。このジプシーの一般論は、文体からしても全く違つたので読者はとまどつてしまうのである。なおメリメの作品には概して注が多いが、ことに「カルメン」は甚だしく、例えば第三章のドン・ペドロ王に就いての長い注や、その事実上の妃である情婦マリア・パディリャに就いての注などは——実も申せば筆者はこの注によつてペドロ一世に惹かれるに至つたのだが——一般読者をして本文への興味を逸脱させるにしか役立たないものであつて、作品と関係ない注が少なからずあるのである。

前述した「カルメン」中の詳細な注でも察せられるように、この頃メリメは『ドン・ペドロ』に打ちこんでいたのであつて、彼は一八四七年七月一日に『カステイリヤ王ドン・ペドロ一世伝』を脱稿し、「両世界評論」誌に連載した後、翌四八年八月に刊行した。これは彼の史伝ものの中で最も長く、また準備期間に歳月を要したものであつて、彼はこの作によつてスペインの歴史アカデミー会員に選ばれたのである。メリメがこの史伝を執筆しようとした動機はスペインの中世と王自身の性格の究明であつた。まず十四世紀が彼の氣に入つたからであつて、彼は「ジャックリの乱」でそれをドラマ化し、一三五〇年に王座を嗣いだドン・ペドロ王が歴史上にもつ残虐王と審判王という二つの

だったのだ。じじつ、必ずしもこのためばかりではなからうが、それからの彼の文学上の仕事は従来とは違って、歴史上の研究や史伝を書くようになるのである。

「カルメン」は作者の意気ごみに反して、発表したとき評判が必ずしも良くなかった。短篇の積み重ねである「コロンバ」は彼の特徴を遺憾なく発揮した作品であり、異国情緒に満ちたナポレオンの生れ故郷を舞台に、勝気な妹に使喚しそされて父親の復讐を遂げる兄のオルソーは、正当防衛が立証されて、恋人とめでたく結婚し、コロンバは二児を失い老いさらばえて死を待つばかりの老パリチーニに出会い、いつそう勝利感を味わうのだが、その勝利感を読者もまた共に味わうことができるのである。人物の配置の仕方といい、事件の運びよう、やま場の設定、伏線の張り方など甚だ巧妙であり、その背景となるコルシカの風物誌と相まって彼の作品中では小説としていちばん整っている傑作である。ところが「カルメン」は、作者を思わせる一考古学者が調査旅行の途上で物語の主人公であるホセと知り合っている。その後獄中でホセに面会して彼から女のために身を誤った身上話を聞くという構成をとっている。この第一章第二章は、ふつう「カルメン物語」としてオペラや映画になっている第三章よりも、小説としては味があっただけである。しかし一般的にはやはり第三章が主題であって興味をひく物語なのであろう。だがこの物語は、一人の純情な青年が、情熱と野性の化身けしんのようなジプシーの女に対する恋情ゆえに道徳上墮落してゆく姿を、スペインを舞台に、密輸入者、山賊、闘牛士といったものを背景に描いた小説で、男は嫉妬のあまりついに女を殺し、自分も死ぬ、女もいつかは自分が殺されるといふ運命にあることを知りつつも、多情なゆえに地道に暮らそうという男の最後の頼みをこぼんで男の刃のもとに倒れる、そういう暗い作品なのである。この結末が読者に与える印象は稀薄であって、ホ

ところが二月革命が起こって、当時パリ警視總監であったドレセール氏は英国へ亡命せざるを余儀なくされ、この別離がメリメと夫人とのあいだに溝を作る結果になったわけで、革命が終わっても夫妻の亡命期間は延長され、その間メリメは夫人と三、四回会っただけだった。ところが夫人はやはりカルメンのような多情な女であったのだろうか、とつぜん彼は五四年十二月二十九日に、夫人から短い絶交状をもらったのである。原因は夫人にマキシム・デュ・カシオンという新しい恋人ができたからだだったが、メリメの受けた心の痛手はあまりにも大きかった。その翌年彼はモンテ・イホ伯爵夫人に、このようなことを書き送っている。

「長いあいだ、ほんとうに愛し合っていた二人の男女を考えてみてください。もう世間ではその二人のことなど忘れていくほど、そんなにも長く深く愛し合っていた二人なのです。ところがある朝、とつぜん女が、十年ものあいだ幸福だったはずの關係に暗い影をさし入れたのです。『別れましょう、わたくしはいつもあなたを愛しています。けれども、もうあなたに会いたくありません』と言うのです。奥さま、このようにとつぜん生涯の幸福を奪われた男の苦しみを、あなたはおわかりになれるでしょうか。だが、この話はほんとうのこととして、わたしの友だちの一人に起きたことなのです。スペインでは、人を恋しながら死ぬと言いますがね……」

この友人なるものこそ、メリメ自身にほかならなかった。しかし彼は、ドン・ホセのように恋人を殺せなかった。彼はただ苦しみ悶え、その別離のにがさを呑みこむより仕方がなかったのである。「わたしはもう仕事をする気がなくなってしまう。だれのために仕事をしたらいいのか、その人がいないのです。わたしには、ある目的があった。その目的がいまはもうない……」と、メリメは述懐している。彼が追い求めた目的、それは彼女の気に入りたいため

は「わたしは生涯、けっして公衆のためになど書きはしなかった。いつも特定のある人のために書いた」と言っているのである。筆者は必ずしもそうとばかりは言えないと思うが、しかし彼が創作するに当たっては、大なり小なりその対象があつたのは否めない。

まず『シャルル九世治世年代記』のヒロインであるテュルジス伯爵夫人は、メリメの二十代の恋人であるラコスト夫人であつて、『モザイク』に収録された短篇その他その頃の戯曲類は、いずれも同夫人に読んでもらいたいために書かれたといつていいだろう。彼はこの五歳年長の浮気な女性のために彼女の夫であるフェリックス・ラコストから挑戦を受け、この決闘好きな、かつてのナポレオン一世の儀仗衛兵のために左肩と左腕に三発弾丸を受けたのである。当時二十四歳の彼は文壇の寵児として、また社交界の花形として、サロンを泳ぎまわっていた。その頃の彼は「エトルリアの壺」の主人公サン・クレールを彷彿させる。じじつ最後の決闘の場面は、フェリックス・ラコストとの決闘に拠つて描かれているのである。

次はドレセル夫人で、旧性はヴァランティヌ・ラボルト、シャルトルの知事ガブリエル・ドレセルの夫人、メリメとの関係は一八三四年ごろからで、五六年までつづいている。ヴァランティヌの父ラボルトは考古学者であり、弟のレオンはメリメと同じく史蹟保存官だつたし、彼の仕事の良き理解者であり、鼓吹者でもあつた。美しく才能に恵まれた彼女は、恋人の仕事を勇気づけ、彼の作品をよく読み、良き助言を与えている。じじつ「イールのヴィーナス」、「コロンバ」、「アルサーヌ・ギヨ」、「カルメン」等の傑作が生れたのは、彼女の存在なしには考えられない。幸いにして夫は非常に慇懃な男であつて二人の関係を知らず、表面上は何事もなくて、メリメは仕合わせだつた。

随筆ふうの史伝「すぎのはらしな相原品」、それに先立つ「栗山大膳」にせよ、「津下四郎左衛門」にせよ、「抽齋」以前の史伝ものにおいては、作者の描かんとする意図はそれなりに果しているのである。彼はなお「わたくしの近頃書いた歴史上の人物を取り扱った作品は……誰の小説とも違ふ。これは小説には、事実を自由に取捨して、纏まりを附けた迹がある習であるに、あの類の作品にはそれが無いからである」と「歴史其儘と歴史離れの」冒頭で断わっているにも拘わらず、これらの歴史小説や史伝めいた小品においては、厳密に言えば「歴史上の事実」そのものを選択する作者の「眼」は存在するのであって、そのなかに作者の創作的な熱情が窺われるのである。

この作者の「眼」はメリメの史伝においても同じく見られるのであって、それにより史実のなかから選択が行なわれているのである。メリメもやはり鷗外と同じように自己の生活を描くようなことはなかった。その点は、内心を見透かれまいと心がけていた彼のこととして自己を素材にした作品は鷗外に比べればはるかに少なく、わずかに「エトルリアの壺」のみで、あとは「二重の誤解」と「アルセーヌ・ギョ」の各主人公にわずかに片鱗を見るだけである。しかも彼の創作活動は、一八四五年十月に「カルメン」を、翌年二月に「オーバン神父」を、四月に「マダム・ルクレツィア小路」を発表した後は、わずかに晩年の短篇を除き創作の筆を絶ち、それ以後はロシア、英米西、その他古代中世におよぶ史実、文学の研究紹介に務める一方自ら史伝の執筆に情熱を傾けている。メリメが小説を書かなくなつたに就いては、長年の恋人ドレセル夫人との仲に破綻をきたしたのも、あずかって大いに力があつたと思われる。これは鷗外が現代小説から歴史小説へと転向し、その素材を求めているうちに史伝へと移行したのとは、いささか経緯を異にし、その点メリメのほうが作家としては本質的にディレクタントと言われても止むを得まい。じじつメリメ

誌に発表された後は単行本にも、また全集にも長いあいだ収録されなかった。彼自身の性生活を科学的に分析して書いたという「キタ・セクスアリス」を掲載した「スバル」は発禁処分となった。鷗外のような政府の高官で、しかも軍人である彼にとっては、現代小説よりも時代を異にする世代の人物を客観的に描き、それによって自己の創作意欲を満たしたほうがはるかに賢明な行き方であるのは言うまでもなからう。彼自ら歴史小説に転向した事情を、『澀江抽斎』の「その三」で次のように説明している。

「わたくしは医者になって大学を出た。そして官吏になった。然るに少い^{わか}時から文を作ることを好んでゐたので、いつの間にやら文士の列に加へられることになった。其文章の題材を、種々の周囲の状況のために過去に求めるやうになつてから、わたくしは徳川時代の事蹟を搜つた。そこに武鑑を検査する必要が生じた。」

そして武鑑搜索中に偶然出会つた人名から「澀江氏と抽斎とが同人ではないか」と調査を始め、その遺族とめぐり会つて、史伝『澀江抽斎』が生れるのは後のことで、彼は大正二年一月の「阿部一族」を始めとして「佐橋甚五郎」、「護持院原の敵討」、「大塩平八郎」、「堺事件」等の一連の武家の気質をテーマにした本格的な歴史小説と、「安井夫人」、「山椒大夫」、「ぢいさんばあさん」、「高瀬舟」、「寒山拾得」などの主として江戸時代の市井の風俗習慣を描きながら、そのなかに現代にも通じるモラルを追求しようとして短篇を書いたのである。有名な「歴史其儘と歴史離れ」中の一節を挙げれば、「わたくしは又現存の人が自家の生活をありの儘に書くのを見て、現在がありがちな儘に書いて好いなら、過去も書いてよい筈だと思った」と言い、そしてその動機として「わたくしは史料を調べて見て、其中に窺はれる〈自然〉を尊重する念を發した。そしてそれを猥に変更するのが厭になつた」と述べている。

劇的な決闘を、賈のドミートリーのむごたらしい最期を、さながら彼がファルコーネ少年の死や堡壘の奪取を描いたのと同じような態度、同じような文体で、まるで人間的なものすべてに対して無関心であるものの如く、感動もなく憐愍の情もなく、喜びも悲しみもなく描いた」と。

このような終止一貫した創作態度なり文体は、鷗外には見られぬものであった。鷗外の初期の短篇「舞姫」、「うたかたの記」、「文づかい」三篇、および訳詩集「於母影」、「埋木」、「即興詩人」の訳文は美文調と言うか、彼自ら「即興詩人」の文体について述べているように「国語と漢文とを調和し、雅言と俚辞とを融合せむと欲せし、放胆にして無謀なる嘗試」によっても察せられるとおり、これら初期の作品は、優雅なる文体によるロマンティックな匂いのつよい叙事詩的な要素に富む作品であった。

もつともメリメにしてもそのデビュー作品はロマンティックな戯曲『クララ・カズルの戯曲集』であり、叙事詩集『グズラ』ではあるが、その翌々年にして長篇『シャルル九世治世年代記』をはじめ「マテオ・ファルコーネ」、「シャルル十一世の幻想」、「堡壘奪取」、「タマンゴ」、「トレドの真珠」等に見られる簡潔にして直截的な文体をもつ独自の客観的な創作態度を確立しているのである。

しかし鷗外の初期作品中に見られるロマンティックな要素は、明治四十二年に発表された「半日」以後はなくなり、口語体による写実主義的な作品となる。そして前述したように「興津弥五右衛門の遺書」を契機として、以後は主として江戸時代の事跡に材を採った歴史小説を書くようになるのである。鷗外がその作中人物の主人公を独占しようとする母親と細君とのあいだにあって苦慮する彼自身の日常生活に材をとった「半日」は、夫人の希望により、雑

についての著述があまりに多いので、カエサルの生涯に関する記述を断念し、その代りに同時代のこの史実を取りあげたのである。つづいて四三年二月に「カティリナの陰謀」を脱稿し、翌年三月に両者を併せて『ローマ史の研究』と題し、ミシェル・レヴィから刊行した。

メリメは四三年八月に「中世における軍事建築物に関する指示」を「フランス史に関する未刊文書集」に発表しており、この種の美術・建築に関する歴史的な研究は枚挙に暇いとまあらず、これらは鷗外の軍事・医学上の史的研究に匹敵し対応するものであろう。『ローマ史研究』中の第一部は、どちらかというところと歴史上の研究に属しているが、「カティリナの陰謀」には具体的な挿話が少なからず散見され、後に彼が史伝ものへ移行する意図の萌芽を見せている。じじつローマ共和制末期に起ったこの国家転覆陰謀という題材そのものが、例えば『賈のドミートリー』その他に見られるようなメリメ好みのものであって、彼はその序文において、その意図するところは「ローマ年代記中の最も異常な事件の一つに光を投げかけ、サルスティウスがその『カティリナ戦記』(紀元前四三年刊)であれほど巧みに描いたことを究明せんとするにあると述べているが、しかし識者の指摘するように、メリメは史家としての義務を良心的に果してはいないものの、読みものとしての史実の絶対的に必要なものを除いて適宜にそれらを削除しているのである。この点は『西周伝』とは違って著者の選択が許されているわけであり、またこのときからしてメリメの創作態度、並びにその簡潔な文体は確立していたのである。同時代者オーギュスタン・フィロンは、次のように論じている。

「彼は生きたドラマを、あたかも作家たちの頭脳から生れ出た想像上のドラマのように歴史上の真実のドラマを語ったのであって、彼は古代中部のイタリア人の敗北を、カティリナの滅亡を、ドン・ペドロとドン・エンリケとの悲

当時部下であった諸将から請われるままに、宮内省および宮家から資料を拝借して鷗外が編纂の任にあたり、数年を費して成ったと森潤三郎氏の「校勘記」にある。この伝記もまた仮印刷に附して宮家以下昵懇の人びとの校閲を経た後、さらに訂正を加えて刊行されたのであるが、すべて中心になって筆を執ったのは鷗外であり、これもまた『西周伝』に比して量・質ともに劣らぬ力作であった。これらの史伝は、平井呈一氏も述べていられるように「事実以外には何物も附加されていない」し、筆者である鷗外の主観はそこには見られないが、「人間が行為した事実を厳密にならべあげた記録のぎりぎりの真実」を記述しているのであって、『西周伝』と相まって、後年鷗外が『澁江抽斎』等の一連の史伝を書くに当って大いに役立ったであろうと忖度される。もちろん『抽斎』は『西周伝』などとは違って荷風が『隠居のごと』で述べているように、「自己と職業、経歴、趣味などに近いもののある抽斎が、全然無知の存在であることに對する忿懣と同情とがあり、未知のものを発掘する創作的な情熱があった」にせよ、これら二つの顕彰のための伝記を編んだことによつて、資料に拠る史伝を書くコツを会得したことは否めまい。

メリメは一八四一年五月に「ローマ同盟市戦争に関する試論」を百五十部の限定版で刊行している。メリメ三十八歳のときで、鷗外の『西周伝』執筆と年齢がほぼ等しいのも奇しき一致であり、これもまた史話ではあるが史伝とは言いがたい。メリメはこの紀元前一世紀（九一〜七一年）における古代の中部イタリアの町村民のローマ市に対する反乱の史実を『コロンバ』執筆中に調べあげ、一八四〇年十月に再度のスペイン旅行から帰つて来た後それらをまとめあげて翌年刊行し、そして四三年十一月に、この著述によつて「碑銘および学芸アカデミー」の会員に選ばれたのである。彼は早くからカエサル生涯に興味を抱き、一八三八年以降ローマ史を研究していたのであるが、カエサル

ときに鷗外三十六歳で、彼が本格的な史伝『澀江抽齋』を書きはじめた大正五年に先立つこと十八年である。この幕末より明治中葉にかけてわが国の新思想新知識の開発に寄与することの大きかったこの碩学せきがくの存在は、鷗外に少なからぬ影響を与えたことと思われる。文久二年（一八六二年）幕府の軍艦注文の使節津田真道に随行して翌年オランダに至った西周は、レイデン大学で政治に関する諸科の学科、即ち性法学、万国公法学、経済学、統計学を学び、そのほか哲学、語学、文学に就いても研究し、語学ははじめ蘭学を修め、後に英語を学び、さらに仏語、独語、また若干のギリシア語、ラテン語にも通じていたといわれる。滞在二年にして慶応元年に帰朝してからは徳川幕府の仏語教習にも当たったそうので、開成所に入り、將軍に随行して京都へ赴いたりした。維新後は山縣有朋の推挙で兵部省に入り、軍事上諸般の制度調査の任にあたり、明治七年には明六社に入って「明六雜誌」を刊行し、明治十一年には東京学士会院に選ばれ、しばしばその院長に推挙され、明治三十六年六十九歳で逝去したのである。

以上は桑木巖翼著『西周の百一新論』に拠ったのであるが、鷗外編の『西周伝』に拠れば、周はひろく漢籍に通じ、また野史小説類を耽読し、能楽狂言をもたしなみ、友と演戯してみせたとある。明治五年十月に、十歳にして父に連れられて上京した鷗外はこの西周邸に寄寓して、ここより本郷壹岐殿進文学舎に入ってドイツ語を学び、明治七年十二歳にして東京医学校に入学し、十四歳のとき本郷元富士町の同校の寄宿舎に移るまで西周邸にいたのだから、この多感な年頃に得た西周の感化はかなり大きいと見ていいだろうと思う。

能久親王は明治二十八年五月三十日に台湾三紹角に上陸なされて、十月二十八日に台南で薨ぜられたのであるが、この征台の役には鷗外もまた従軍して居り、この『能久親王事蹟』も北白川宮殿下が近衛師団長として台湾御征伐の

ル九世治世年代記』を書いている。この歴史小説はデュロングが指摘しているように、メリメがジャン・ド・メルジエーの『追想録』を読んで、その第一ページに著者の弟のベルナル・ド・メリジェーなる名前を見出し、それからヒントを得てジョルジュとベルナルという二人の主人公を設定したのであって、明らかに仮想人物が主人公であり、聖バルテルミー事件は背景であるに過ぎない。だがこの小説にあつて彼は、旧教徒側の非道な暴虐ぶりを難じ、新教徒側の受難を同情的に描き、ことにコリニー提督の人となりについてはその寛容さを称揚し、ラヌー將軍の抱いている諦観ぶりを好意的に描いている。

鷗外が歴史小説に筆を染めたのは諸家の指摘するように、乃木大將の殉死に触発されて書いた「興津弥五右衛門の遺書」からであり、以後はほとんど現代小説の筆を絶つたといつていい。もっとも彼は明治三十一年十一月に『西周伝』を書いており、四十一年六月には棠陰会編として『能久親王事蹟』を執筆し、春陽堂から刊行している。前者は西家からの依頼によるものであり、明治二十八年三月岩波書店刊行の『鷗外全集』に付せられた森潤三郎氏の「校勘記」に拠ると――

「西周先生の生父時義は、わたくし達の曾祖父高亮の二男で、時雍の養子となつて西家を継いだ。明治五年兄が上京するようになったのも、前年先生が国へ来られた時の勧誘に依つたものであり、進文学社に入つてからも先生の神田小川町の邸に寄寓して通学した。『西周伝』は斯桜な縁故から、先生薨後継嗣紳六郎より依頼を受け、先生手録の日記その他の資料を基として稿本を作り、それを仮印刷に附して先生生前の知友に示して訂正を請ひ、明治三十一年十一月二十一日西家蔵版非売品として配布された」とある。

に被り通した人であった。驚くべき意力である」と述べているが、その意力は臨終まで持続されたのである。

メリメもまた若いころから人に内心を見透かされまいとして傍観者としての立場をとる一種のポーズを取っていたが、しかしそれは晩年になるに従い一八六〇年代に入ると崩れて、その書簡中に寂しさの訴えとペシミズムの吐露を随所に見いだすようになるのである。その点鷗外のほうが最期の息を引きとるまで隙のないポーズを張り通したと言えよう。

ただ二人に共通している点は共に〈無信仰〉であることであって、鷗外も信仰心はなく、メリメもその葬儀が遺言によりプロテスタントの牧師により執行されたとしても彼が終世無信仰者として過したことは変りがなく、鷗外の葬儀が仏教によったのも大方の日本人と同じく、あくまでも儀式として止まったのは申すまでもあるまい。

筆者は少しく二人の人となり、特にその晩年およびその死に臨む処し方に就いて述べた。次に両者の文学、主として歴史小説・史伝を中心に筆を進めていきたい。

メリメは一八二三年三、四月ごろから、十九歳にして一種の人形劇の台本「クロムウェル」を書き、二五年二十二歳のとき、ドレクリューズ家のサロンで、『クララ・ガスルの戯曲集』に収録されることになる戯曲を次々と朗読したのであって、鷗外が「調高矣洋絃一曲」を「読売新聞」に載せ、「於母影」を「国民之友」へ発表したのは明治二十二年二十七歳であったから、メリメのほうが早くから文学活動に入ったといえる。しかもメリメは叙事詩『グズラ』、戯曲「ジャックリの乱」、「カルバハル家の人びと」を書いた後、二十六歳にしてすでに長篇歴史小説『シャル

しい獅子の権威を以て、死ぬる人鷗外のその死の権威において、おごそかにしかし静かにあたえなかつたのであろうか」と反問し、鷗外が文学や哲学に関してディレッタント呼ばわりされていたにも拘わらずそうでなかつたように、彼の官吏としての在り方にあつても決してディレッタントな官吏ではなかつたと説き、つまり「官権威力」という言葉を広義に解釈し、鷗外にあつてはその「官権威力」のなかに、彼の四十年以上の生涯があつたのであつて、そのもろの自体が彼の遺言状の結局の受け取り手であつたと言う。であればこそ彼は、「おそらく、ほとんど絶望的な最後の反噬を試みたのであつた」としている。そして『舞姫』の主人公太田豊太郎の嘆き「嗚呼、相沢謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我脳裡に一点の彼を憎むころ今日まで残れり」を引用し、その相沢を憎む思いから、つまり「ばかな鷗外は賢い鷗外に絶えず押しつけられながらその賢い鷗外と戦つてきた」のであつて、そこで彼は「あえて最後に愚を演じた。全くはからいなしに彼は衝き返した。彼は貴人をも上官も憚らなかつた。文字どおりそれは反噬であつた」としているのである。

中野氏の『遺言状のこと』から長々と引用したが、氏の解釈を度外視して鷗外の遺言状に触れ得ないからであつて、もちろんこのような見方は確かに是認し得るが、わたくしは彼が死に臨んで吐露した「馬鹿々々しい」という一語を遡つて重く解釈し、彼が死に臨んで虚名に過ぎない位階勲等を退け、単なる個の森林太郎を強調したのだと単純に考えてもいいのではないかと思う。同時にこの今際の一言で彼は始めて従来かぶり通してきた「仮面」を脱いだと言い得よう。これは中野氏の言う「反噬」にも通じるわけであつて、中村光夫氏もまた違った表現で、「結局彼は生涯自己の心の表出に或る隙のないポーズを張り通した人であつた。或る仮面を自己の生命とし、これを破綻を見せず

鷗外には、その死後遺族がけっして路頭に迷わぬという確信があり、彼が書いたものは日記から遺言状に至るまで、すべて必ず刊行されるであろうという自信があった。であればこそ中野重治氏が指摘しているように、死後の外形的な取扱いの問題が、彼の最後の関心事となつたのであろう。果して遺言を口述した六日の翌日には両陛下から葡萄酒が下賜され、八日には特旨をもつて位一級を進められ従二位に叙せられた。勲一等功三級、そういった位階勲等をあくまでもこぼみ、彼は〈石見人森林太郎〉として死ぬことを、何人の容喙をも許さぬとして強く要求したのである。

森茉莉氏が鷗外のもつ〈恬淡さ〉について述べている。「父には執念がなく、すべてに恬淡だった。人間にも、家にも、金銭にも、名誉にも、すべてに恬淡であつた。家は貸家でもいい、金も要らない、名誉も要らない、といふやうな恬淡ではない。家は位置に相当した家を建ててゐるし、金も一生懸命に仕事をして収入があると本を買ひ、葉巻を買ひ、一年に一度のクリスマスには子供達の為に纏つた金を使った。……『金が汚らほしい、といふのは間違つてゐる。ものを知らない人間が持つことがいけないのだ。金があるなら持つてゐるがいい。いつでも未練なく捨て得る心を持つてゐればいいのだ』。これは父が母に言つたといふ言葉だ。名誉もあれば持つてゐていい。どうしても無い方がいいなぞといつて騒ぐほどいいものではない、といふのが父の考へであつた。」

これほど達観した良識の持ち主である鷗外が、何故死後の外形的な取扱い方に対して、あれほど強い反発を示したのはどういふわけか？ もしこれに彼の銜てらいを見るなどと言う者があるとすれば、それこそ下司の勘繰りと言うべきであらう。しかしそういう見方もしようと思えば可能でもある。中野重治氏は「何故鷗外はその指図を、彼にふさわ

「自分は此儘で人生の下り坂を下って行く。そしてその下り果てた所が死だといふことを知って居る。併しその死はこはくはない。人の説に、老年になるに従って増長するといふへ死の恐怖が、自分には無い。」そして最後に「かくして最早幾何もなくってある生涯の残余を、見果てぬ夢の心持で、死を怖れず、死にあこがれずに、主人の翁は送ってゐる」と、仮想の老人に托して自分の心境を描いている。しかも彼はこの短篇を書いてから、恵まれた残余の生涯を十年余りも過ごしたのだった。

病氣になった鷗外は、大正十一年六月十五日に役所を休み、病床に就いた。その月二十九日に始めて医者に見てもらい、その日まで自分でつけていた日記をやめ、その翌日から七月五日まで口述して日誌をしるした。翌六日には病状が悪化して衰弱が甚だしかったが、しかし意識ははっきりしていて遺言状を賀古鶴所に口授して書かせ、それに拇印を押した。ひろく知られている遺言状である。

「余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ賀古鶴所君ナリ。コ、ニ死ニ臨ンテ賀古君ノ一筆ヲ煩ニス。死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ。奈何ナル官憲威力ト雖、此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス。余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス。宮内省陸軍皆縁故アレドモ生死別ル、瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス。森林太郎トシテ死セントス。墓ニ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス。書ハ中村不折ニ依託シ、宮内省陸軍ノ栄典ハ絶対ニ取りヤメヲ請フ。手続ハソレゾレアルベシ。コレ唯一ノ友人ニ云ヒ残スモノニシテ何人ノ容喙ヲモ許サス。」(句読点筆者補)

かくて彼は、七月九日午前七時に逝去した。病名は萎縮腎、遺言どおり十二日に谷中斎場で仏式により葬儀を行った後、遺骨を向島弘福寺に納め、墓表を中村不折が〈森林太郎墓〉と六朝体でしるした。

変化が彼女の身に起こるだろうと感じて苦んだのです……わたしが最後にお会いしたとき、彼女は栄光に包まれていました。彼女は少しも幻影を抱いていませんでした。ただお子さんの将来にしか希望を持っていないと言っていました。それは幸福な、野望のない生活なのでした。

わたしは生涯、偏見を捨てようと努めました。フランス人であるより先に、世界の市民たらんと念じました。しかしすべて、こうした哲学的な欺瞞は、なんの役にも立たなかったのです。わたしは今日、フランス人であるこれらばかりか者どもの受けた傷のために自分の血を流し、彼らの被った屈辱のために泣いているのです。彼らが如何に恩知らずであり、どんなに愚かであろうとも、わたしはやはり彼らを愛さずにはいられないのです……」

しかしこの告白は、よしんばここで如何に愛国主義を表明しようとも、五十年のあいだ彼がすぐれた世界人であったということ、彼が国民としての、また宗教上のあらゆる偏見を憎んでいたことを否定するものではない。かくて彼は、ラグデン嬢とエワーズ夫人の献身的な介抱もその甲斐なく、九月二十三日の夜、さながらやすらかに眠るように息をひきとったのだった。臨終の二時間前に、彼はツルゲネーフとジェニー・ダカン宛に短い手紙を書いているのを見ると、最後まで意識がはっきりしていたと思われる。

それにしても晩年の彼の手紙のなんと暗いことであろう！ 絶えざる病軀の訴え、刻々に迫る社会情勢の不安、まさに死期の来たることを知りつつ筆を執らずにいられた孤独な彼の寂寥感を感じないわけにいかない。

その点鷗外の晩年は、そして死に臨んでも後顧の憂いはなく、仕合わせだったと言えよう。死に対しても彼ははるかに達観していて、いかにも科学者らしい諦感をもって臨んでいる。彼は『妄想』のなかで、語っている。

個人の力ではどうすることもできなかったのである。このときはじめて、いままで人に涙を見せたことのないメリメが、さめざめと泣いたそうである。翌日彼は最後の力を奮い起こして、これが見納めの元老院へ坐りに行った。彼はここで、セダンの降服を知ったのである。

彼の大きな悩みの一つは、もう今後皇妃に会えないことだった。彼は十日にカンヌへ向って発ち、それっきり再びパリへは戻って来なかった。十三日に彼は身のまわりを整理し、ロンドンのパニッチ宛に最後の手紙を書き送った。

「……方一の場合、最大の信頼をもって最も臆面なくなんでも言えるのは、あなたです。あなたは小生のために、そちらの銀行に若干の預金をしておいてください。それに小生には、まだ北部鉄道の株があります。それは年に四、五千フランの額を保証してくれます。最後はフランス政府の年金で、およそ一万六千から一万八千フランの年収があります。これらの年金からどのくらい残るでしょうか？ それでも幾らかは、病気が重く、死期が近づいているその名義人を埋葬するに足るぐらいのものは、残してくれるだろうと思っておりますが……」

われわれのお友だち(ウージェニーは、皇妃のこと)は、たしかにお宅の近所のハミルトン・ホテルにいられるはずで。でしたらあなたは、手紙を書いて、あの方をインヴァギャリーへお連れすべきです。きっと、そこがお気に入りでしよう……この問題で手紙を書きつづけるには、あまりに苦しすぎます。」

カンヌへもどった彼は静かな死を願いながらも、やはり国の苦しみを自分も苦しまねばならなかった。彼は同じ日にポーランクール夫人へ宛てた最後の手紙で、このように書き送っている。

「……わたしは最後の日にわれわれのお友だちに会わなかったのを、非常に残念に思います。わたしは何か大きな

「……あなたのおっしゃるように〈帝政の端緒〉は、わが大統領のごとき偉大な政治家にとっては、いささか莊嚴でありすぎ、詩的でありすぎたように思われます。しかし皇帝の最も大きな間違いは、自ら議会にとって代ろうとしたことであり、諮問機関の廃止を勧告しておきながら、自らの名においてそれを設けたことです。それに引きつづいて、至るところに混乱が生じたのです……」

この場合の〈偉大な政治家〉はもちろん比喩的な意味でそう言ったにすぎず、これは一八六七年二月十五日の立法院の会議において、法制局長官ウァレウスキー伯爵が述べた「皇帝は治世の初めに宣せられた政策を忠実に守られ、進歩の道を確たる足取りで歩まれていられる」という言辞に対応するものであって、事実はその後メリメがルイの過ちを指摘しているように、二月革命によって施行されるに至った普通選挙による任期六か年の議員で構成される立法院は法律案を討議し表決するのみで発議権も修正権もなく、予算案も上程はされるが各項目の審議なしに総額を票決するに止り、大統領自らの名において任命する終身議員、枢機僧、陸海軍元帥より成る元老院が新設され、それが諮問機関となったのである。

メリメは一八七〇年八月十八日と二十日にティエールに会っているが、彼はこの親愛の情を寄せている小男の老人の心に、なんら触れることなくして終わった。彼は次のような悲痛な叫び声を洩らしている。「時代は苦悶のうち、われわれとともに過ぎてゆく。ファイニス・ガリエ」

メリメは皇妃に対する憐愍の情に堪えず、またもや九月三日に、病いの身を押ししてティエールに会いに行き、皇妃のために、また皇帝のためにも取りなしを請うたが、形式的な拒絶にあっただけだった。事態はすでに、ティエール

メリメは一八六五年二月二十六日の「モントゥール・ユニヴェルセル」に「『ユリウス・カエサル伝』の序文」を掲載し、同年十月一日の「ジュルナル・デ・サヴァン」誌に、「『ユリウス・カエサル伝』第一巻についての報告」を、また六六年五月十二日にはナポレオン三世の『ユリウス・カエサル伝』第二巻がプロン社から刊行されたので、その報告を同年七月の「ジュルナル・デ・サヴァン」誌に掲載した。これらナポレオン三世の執筆活動に対する廷臣としての苦衷のほどは、六五年九月十二日発信のジェニー・ダカン宛の手紙に記されている。

「わたしはイギリスでは、それほど退屈せずすみしました。甚だ快適な二、三の旅行以外に、すでにお話しましたが『ユリウス・カエサル伝』について、「ジュルナル・デ・サヴァン」誌に論説を書きました。このような仕事をさせるに至ったのは、学術団体でありますから、どうしてもしないわけにはいかなかったのです。あなたは、わたしがその著者ならびにその著作についてどう考えているかということとは、じゅうぶんごぞんじのはずです。と同時に、廷臣として通ることを望まず、かつまたあまり無作法なことも言いたくないというためには、そのことが如何にむずかしいか、よくおわかりのことと思います。うまくやっつてのけられればいいかと念じておりますが……」

幼いころ膝の上に抱いてあやしたり、童話を話してやったウージェニー皇妃との関係で元老院議員となったメリメは、最初のうちはルイ・ナポレオンを蔑視していたものの、ルイのなかに人から愛される一面があつて、しだいにこの男に親近感を抱くようになったのだと、アンドレ・ビーがその著『メリメ』で述べているが、その親愛感がどの程度のものであったかは、甚だ疑問である。一八六七年二月二十日カンヌ発ポーランクール夫人宛の手紙で彼は、このようにルイを批判し非難している。

ているだけで政治家の御手並拜見という傍観的態度はとっていられなくなり、彼は彼なりに大正八年十二月二十四日付の書簡で、賀古鶴所宛にこのように書き送っている。

「御話申上候社会政策猶細密に申上度近日又々参上仕度存居候。名をつくれば『国体に順応したる集産主義』Collectivism なり、即ち共産主義 Communism の反対なり——とでも謂ふべきか、又『国家社会主義』(国家が生産の調節をするゆえに)と云ふものに近けれども、世間に唱え居るは同盟罷工や群衆の示威運動にて成功せんとするものゆゑ、全く別に有之候。猶研究中に御座候」と。

つまり問題を労働問題に限って、それに対する社会政策を具申したのである。それは当時としてはかなり思い切った社会政策を打ちだしていて、「同盟罷工は革命の端緒たるおそれあり」と憂うる一方では八時間労働の効果を力説し、しかも「帝室を保存するという条件以外は非常に過敏であつて、労資協調などは生ぬるいとなし、血をみる方法、非合法的な政体革新運動を促進し、経済的には一君万民の体制、官営主義を唱え、これが実行力の根を山縣公に求めていたらしい」というのである。しかし鷗外は極秘裡に事を進めていたとみえ、山縣公を中心とする勢力によってそれを遂行しようとしたのだが、公が十一年二月一日に逝去したので、この国家社会主義革命の企図は水泡に帰してしまつた。

メリメはウージェニー皇妃とはかなり親密感を持つてはいたものの、ナポレオン三世とは一線を劃して接して居り、もし彼が政治的に行動したとすれば、それは第二帝政が崩壊したとき、ウージェニー皇妃のために個人的に国防政府のティエールにはたつきかけたぐらいである。ナポレオン三世の廷臣としてはどうであつたらうか。

に任えて海軍省に入り、同年三月、伯に従って商務土木省に移り、翌三二年には官房秘書課長となり、同年十二月ダ
ルグー伯とともに内務省に移り、現職のまま参事院請願委員を拝命、三四年には史跡保存官となり、三七年には史跡
保存委員会の書記拝命、四八年の二月革命後も引きつづいて史跡保存官として留任し、新政府によりチェイルリ宮殿
の宝物管理を依頼され、五三年六月に元老院議員に任命され、第二帝政治下の廷臣として一八七〇年三月六十七歳に
してカンヌに没するまで、元老院議員として文筆活動をつづけていた。

だが鷗外は、石黒忠恵に宛てた大正五年十二月六日付の書簡によると、それには彼が陸軍省医務局長を退官したの
ち貴族員議員に勅選される話が書かれてあり、彼自身もそうなることを望み心待ちしていたにも拘わらず、最初のう
ちこそ有力視されていたのに、ついに貴族院議員にはなれなかつたのである。

一方メリメは、自ら欲することなくして唯ウージェニー皇妃との個人的な関係というだけで、元老院議員に推挙さ
れたのだった。しかも彼はその顯官の地位を、政治的な志を遂げるに自ら進んで使おうなどとは決してしなかつたの
である。

その点鷗外のほうが、はるかに政治的に動いて権謀術策を弄している。大正六年にロシアに革命が勃発すると、ニ
コライ二世が退位してロマノフ王朝が滅び、共産主義の政府が樹立してレーニンが首相となり、翌七年には独逸が降
服して第一次大戦が終わり、ヴィルヘルム二世が退位してドイツに社会民主革命が起り、わが国はシベリアに出兵す
るのである。そして国内には労働争議が頻発し、普選論が生じる。こうした内外の動きに対して鷗外が如何に処した
か、唐木順三氏著『森鷗外』に掘り探してみるに——鷗外は上野の清間の地で隠居然として、つまり図書頭に納まっ

森鷗外とメリメ

江 口 清

わたくしはプロスペル・メリメの歴史小説や史伝ものを訳載しているとき、よく森鷗外のこの種の作品のことを思った。この二人の文学の在り方、その人となりの似通っている点については、すでに幾度か論じられ指摘されてはいるが、メリメの訳者としてわたくしもその驥尾きびに付して、わたくしなりに考えてみたい。

鷗外は明治以降の近代文学者のなかにあつて、じつに仕事の場のひろい人であり、そのためか文学上のディレッタントであると思われていたが、メリメもやはり当時の仏文壇ではそう思われていた。共に高級官吏にして、多少の差はあるが宮廷人であり、共に外国語に長じて翻訳の業績も多く、小説・戯曲を書いて、後年史伝を書くに至った。

鷗外は周知のとおり、明治十四年（一八八二年）十二月、十九歳にして陸軍軍医副に任ぜられ、爾来大正五年五十四歳にして陸軍軍医総監・陸軍省医務局長を辞任するまで軍医務に尽し、なお翌六年には宮内省帝室博物館総長兼よのかみ書頭に就任、高等官一等となり、大正十一年満六十歳にしてその輝やかしい生涯を終えるまで、政府高官と文筆業という二足のわらじを履きつづけた。

メリメがやはりそうで、少し年長だが一八三二年二月、二十八歳にして、ブロイ公爵の庇護を受け、ダルグー伯爵